

# 湯ヶ原ゆき

国木田独歩

青空文庫



定めし今時分は閑散だらうと、其閑散を狙つて來て見ると案外さうでもなかつた。殊に自分の投宿した中西屋といふは部屋數も三十近くあつて湯ヶ原温泉では第一といはれて居ながら而も空室はイクラもない程の繁盛であつた。少し當は違つたが先づく繁盛に越した事なしと斷念めて自分は豫想外の室に入つた。

元來自分は大の無性者にて思ひ立た旅行もなか／＼實行しないのが今度といふ今度は友人や家族の切なる勸告でヤツと出掛けることになつたのである。『其處に骨の人行く』といふ文句それ自身がふらく／＼と新宿の停車場に着いたのは六月二十日の午前何時であつたか忘れた。兔も角、一汽車乗り遅れたのである。同伴者は親類の義母であつた。此人は途中萬事自分の世話を焼いて、病人なる自分を湯ヶ原まで送り届ける役を持て居たのである。

『どうせ待つなら品川で待ちましようか、同じことでも前程へ行つて居る方が氣持が可いから』

と自分がいふと

『ハア、如何でも。』

其處で國府津までの切符を買ひ、品川まで行き、其プラツトホームで一時間以上も待つことゝなつた。十一時頃から熱が出て來たので自分はプラツトホームの眞中に設けある四方硝子張の待合室に入つて小さくなつて居ると呑氣なる義母はそんな事とは少しも御存知なく待合室を出て見たり入つて見たり、煙草を喫つて見たり、自分が折り話しかけても只だ『ハア』『そう』と答へらるゝだけで、沈々黙々、空々漠々、三日でも斯うして待ちますよといはぬ計り、悠然、泰然、茫然、呆然たるものであつた。其中漸く神戸行が新橋から來た。特に國府津止の箱が三四輛連結してあるので紅帽の注意を幸にそれに乗り込むと果して同乗者は老人夫婦きりですぐすいゝ。頗る空て居た、待ち疲れたのと、熱の出たのとで少なからず弱て居る身體をドツかと投げ下すと眼がグラついて思はずのめりさうにした。

前夜の雨が晴て空は薄雲の隙間から日影が洩ては居るものゝ梅雨季は争はれず、天際は重い雨雲が被り重なつて居た。汽車は御丁寧に各驛を拾つてゆく。

『義母 此處は梅で名高ひ蒲田です。ね。』

『そう?』

『義母 田植が盛んですね。』

『そうですね。』

『御覽なさい、眞紅な帯を結めて居る娘も居ますよ。』

『そうですね。』

『義母 川崎へ着きました。』

『そうですね。』

『義母 お大師様へ何度お参りになりました。』

『何度ですか。』

これでは何方が病人か分なくなつた。自分も斷念めて眼をふさいだ。

二

トロリとした間に鶴見も神奈川も過ぎて平沼で眼が覺めた。僅かの假寢ではあるが、それでも氣分がサツパリして多少か元氣が附いたので懲すまに義母に

『横濱に寄らないだけ未だ可う御座いますね。』

『ハア。』

是非もないこと、自分も断念めて咽喉疾には大敵と知りながら煙草を喫い初めた。老人夫婦は頻りと話して居る。而もこれは婦の方から種々の問題を持出して居るやうだそして多少か煩いといふ氣味で男はそれに説明を與へて居たが随分丁寧な者で決して『ハア』『そう』の比ではない。

若し或人が義母の脊後から其脊中をトンと叩いて『義母！』と叫んだら『おどろ』と驚いて四邊をきよろしく見廻して初めて自分が汽車の中に在ること、旅行しつゝあることに氣が附くだらう。全體旅をしながら何物をも見ず、見ても何等の感興も起さず、起しても其を折角の同伴者と語り合せて更に興を増すことももしないなら、初めから其人は旅の面白みを知らないのだ、など自分は獨り腹の中で愚痴つて居ると『あれは何でしょう、そら彼の山の頂邊の三角の家のやうなもの。』

『どれだ。』

『そら彼の山の頂邊の、そら……。』

『どの山だ』

『そら彼の山ですよ。』

『どれだよ。』

『まあ貴下あれが見えないの。ア、最早見えなくなつた。』と老婦人は残念さうに舌打をした。義母は一寸と其方を見たばかり此時自分は思つた義母よりか老婦人の方が幸福だと。

そこで自分は『對話』といふことに就て考へ初めた、大袈裟に言へば『對話哲學』又たの名を『お喋舌哲學』に就て。

自分は先づ劈頭第一に『喋舌事の出来ない者は大馬鹿である』

### 三

『喋舌ることの出来ないのを稱して大馬鹿だといふは餘り残酷いかも知れないが、少くとも喋舌らないことを以て甚く自分で豪らがる者は馬鹿者の骨頂と言つて可ろしい而して此種の馬鹿者を今の世にチヨイく見受けるには情ない次第である。』

『旅は道連、世は情といふが、世は情であらうと無からうと別問題として旅の道連

は難有たい、マサカ獨りでは喋舌れないが二人なら對手が泥棒であつても喋舌りながら歩くことが出来る。』など、それからそれと考へて居るうち又眠くなつて來た。

睡眠は安息だ。自分は眠ることが何より好きである。けれど爲うことなしに眠るのはあたら一生涯の一部分をたゞで失くすやうな氣がして頗る不愉快に感ずる、處が今の場合、如何とも爲がたい、眼の閉るに任かして置いた。幾分位眠つたか知らぬが夢現の中に次のやうな談話が途斷れ〜に耳に入る。

『貴方お腹が空きましたか。』

『……甚く空いた。』

『私も大變空きました。大船でお辨を買ひましよう。』

成程こんな談を聞いて見ると腹が空いたやうでもある。まして沈黙家の特長として義母も必定さうだらうと、

『義母 お腹が空きましたらう。』

『イ、エ、それでも有りませんよ。』

『大船へ着いたら何か食べましよう。』

『今度が大船ですか。』

『わたしね居たから能く分りませんが、』と言ひながら外景を見ると丘山樹林の容様が正にそれなので  
 『エ、最早直ぐ大船です。』  
 『大變早いこと！』

## 四

大船に着くや老夫婦が逸早く押ずしと辨當を買ひこんだのを見て自分も其眞似をして同じものを求めた。頸筋は豚に似て聲までが其らしい老人は辨當をむしやつき、少し上方辯を混ぜた五十幾歳位の老婦人はすしを頬張りはじめた。  
 自分は先づ押ずしなるものを一つ摘んで見たが酢がき過ぎてとても喰へぬのでお止めにして更に辨當の一隅に箸を着けて見たがポロ／＼飯で病人に大毒と悟り、これも御免を被り、元來小食の自分、別に苦にもならず總てを義母にお任して茶ばかり飲んで内心一の悔を懐きながら老人夫婦をそれとなく觀察して居た。  
 『何故「ビールに正宗……」の其何れかを買ひ入れなかつたらう』といふが一の悔であ

る。大船を發して了へば最早國府津へ着くのを待つ外、途中何も得ることは出来ないと思ふと、淺間しい事には猶ほ残念で堪らない。

『酒を買へば可かつた。惜しいことを爲た』

『ほんとに、さうでしたねえ』と誰か合槌を打て呉れた、と思ふと大違の眞中。おつかさん、は今しも下を向て蒲鉾を食ひ欠いで居らるゝ所であつた。

大磯近くなつて漸と諸君の晝飯が了り、自分は二個の空箱の一には笹葉が残り一には煮肴の汁の痕だけが残つて居る奴をかたづけ腰掛の下に押込み、老婦人は三個の空箱を丁寧を重ねて、傍の風呂敷包を引寄せ其に包んで了つた。最も左様する前に老人と小聲で一寸と相談があつたらしく、金貸らしい老人は『勿論のこと』と言ひたげな様子を首の振り方で見せてたのであつた。

此二一の悲劇が終つて彼是する中、大磯へ着くと女中が三人ばかり老人夫婦を出迎に出で居て、其一人が窓から渡した包を大事さうに受取つた。其中には空虚の折箱も三ツ入つて居るのである。

汽車が大磯を出ると直ぐ（吾等二人ぎりになつたので）

『義母今の連中は何者でしょう。』

『今のツて何に？』

『今大磯へ下りた二人です。』

『さうねえ』

『必定金貸か何かですよ。』

『さうですかね』

『でなくても左様見えますね』

『婆様は上方者ですよ、ツルリンとした顔の何處に「間拔の狡猾」とでも言つた

やうな所があつて、ペチャクリ〜老爺の氣嫌を取て居ましたね。』

『さうでしたか』

『妾の古手かも知れない。』

『貴君も随分口が悪いね』とか何とか義母が言つて呉れると、益々悪口雑言

の眞價を發揮するのだけれども、自分のは合憎く甘い言をトン〜拍子で言ひ合ふやう

な對手でないから、間の抜けるのも是非がない。

箱根、伊豆の方面へ旅行する者は國府津まで來ると最早目的地の傍まで着るた氣がして心も勇むのが常であるが、自分等二人は全然そんな様子もなかつた。不好きな處へいや／＼ながら出かけて行くのかと怪まるゝばかり不承無承にプラツトホームを出て、紅帽に案内されて兔も角も茶屋に入つた。義母は兔につまゝられたやうな顔つきをして、自分は狼につまゝられたやうに顔をして（多分他から見ると其様顔であつたらうと思ふ）『やれ／＼』とも『先づ／＼』とも何とも言はず女中のすゝめる椅子に腰を下した。

自分は義母に『これから何處へ行くのです』と問ひたい位であつた。最早我慢が仕きれなくなつたので、義母が一寸と立て用たしに行つた間に正宗を命じて、コツプであほつた。義母の來た時は最早コツプも空壇も無い。

思ひきや此藝當を見ながら

『ヤア、これは珍らしい處で』と景氣よく聲をかけて入て來た者がある。

可愛さうに景氣のよい聲、肺臟から出る聲を聞いたのは十年ぶりのやうな氣がして、自分は思はず立上つた。見れば友人M君である。

『何處へ?』彼は問ふた。

『湯ヶ原へ行く積りで出て来たのだ。』

『湯ヶ原か。湯ヶ原も可いが此頃の天氣じやアうんざりするナア』

『君は如何したのだ。』

『僕は四五日前から小田原の友人の宅へ遊びに行て居たのだが、雨ばかりで閉口したから、これから歸京うと思ふんだ。』

『湯ヶ原へ行き玉へ。』

『御免、御免、最早飽きくした。』

平凡な會話じやアないか。平常なら當然の挨拶だ。併し自分は友と別れて電車に乗つた後でも氣持がすがくして清涼劑を飲んだやうな氣がした。おまけに先刻の手早き藝當が其効果を現はして来たので、自分は自分と腹が定まり、車窓から雲霧に埋れた山々を眺め

『走れ走れ電車、』

圓太郎馬車のやうに喇叭を吹いて呉れると更に妙だと思つた。

## 六

をだはら 小田原は街まで長い其入口まで來ると細雨が降りだしたが、それも降りみ降らずみた  
 いした事もなく人車鐵道の發車點へ着いたのが午後の何時。半時間以上待たね  
 ば人車が出ないと聞いて茶屋へ上り今度は大ぴらで一本命じて空腹へ刺身を少ばかり  
 入れて見たが、惡酒なるが故のみならず元來八度以上の熱ある病人、甘味か  
 らう筈がない。悉くやめてごろり轉がるとがつかりして身體が解けるやうな氣がした。旅  
 行して旅宿に着いて此がつかりする味は又特別なもの、「疲勞の美味」とでも言は  
 うか、然し自分の場合はそんなどころではなく病が手傳つて居るのだから鼻から出る息の  
 熱を今更の如く感じ、最早や身動きするのもしやになつた。

しかし時間が來れば動かぬわけにいかない只だ人車鐵道さへ終れば最早着ゐたも同  
 様と其を力に箱に入ると中等は我等二人ぎり廣いのは難有いが二時間半を無言の  
 行は恐れ入ると思つて居ると、巡查が二人入つて來た。

一人は張飛の瘦て弱くなつたやうな中老の人物。一人は關羽が鬚髯を剃り落  
 して退隱したやうな中老以上の人物。

腰やせた張ちやうひ飛ひは眞まなづる鶴ちゆうざいしよ駐ちゆうざいしよ在所きんむに勤務きんむすること既に七八年すでねん、齋藤さいとう巡查じゆんさと稱しょうし、退た隱いんの關羽くわんゆうは鈴木すずき巡查じゆんさといつて湯ヶ原ゆはらに勤務きんむすること實じつに九年ねん以上いじやうであるといふことは、後あとで解わかつたのである。

自分じぶんの注文ちゆうもんどほ通り、喇叭らつぱの聲こゑで人車じんしやは小田原をだはらを出發たつた。

## 七

自分じぶんは如何どういふものかガタ馬車ばしやの喇叭らつぱが好きだ。回くわいさう想れんさうも聯想れんさうも皆みな面白おもしろい。春はるの野路のぢをガタ馬車ばしやが走る、野のは菜なの花はなが咲さき亂みだれて居ある、フワリくと生なまぬる温かぜい風かぜが吹ふいて花はなの香かほりが狭せまい窓まどから人ひとの面おもてを掠かすめる、此このとき時とき御者ぎよしやが陽氣やうきな調子てうしで喇叭らつぱを吹ふきたてる。如何いく嫁よめいびりの胡麻ごまし白しろ婆ばあさんでも此このとき時ときだけはのんびりして幾いく干かんか善ぜん心しんに立たちかかへるだらうと思おもはれる。夏なつも可よし、清せい明めいの季き節せつに高たか地ちの旦たん道だうを走はしる時ときなど更さらに可よし。ところが小田原をだはらから熱海あたままでの人車じんしや鐵道てつだうに此この喇叭らつぱがある。不愉快ふゆくわい千萬せんな此交このかう通つう機き關くわんに此この鳴物なりものが附ついてる丈だけで如何どうか興きやうを助たすけて居あるとは兼かねて自分じぶんの思おもつて居あたところである。

先づ二臺の三等車、次に二等車が一臺、此三臺が一行になつてゴロ／＼と停車場を出て、暫時くは小田原の場末の家立の間を上には人が押し下には車が走り、走る時は喇叭を吹いて進んだ。

愈々《いよ／＼》平地を離れて山路にかゝると、これからが初まりと言つた調子で張飛巡査は何處からか煙管と煙草入を出したがマツチがない。關羽も持て居ない。これを見た義母は徐に袖から取出して

『どうかお使い下さいまし。』  
と丁寧と言つた。

『これは／＼。如何もマツチを忘れたといふやつは始末にいかんもので。』  
と巡査は一ぷく點火てマツチを義母に返すと義母は生眞面目な顔をして、それを受取つて自身も煙草を喫いはじめた。別に海洋の絶景を眺めやうともせられない。どんより曇つて折り／＼小雨さへ降る天気ではあるが、風が全く無いので、相摸灣の波靜に太平洋の煙波夢のやうである。噴煙こそ見えないが大島の影も朦朧と浮かんで居る。

『義母 どうです、佳い景色ですね。』

『さうねえ。』

『向うに微に見えるのが大島ですよ。』

『さう？』

此時二人の巡查は新聞を讀んで居た。關羽巡查は眼鏡をかけて、人車は上だからゴロゴロと徐行して居た。

八

景色は大いが變化に乏しいから初めての人なら兔も角、自分は既に幾度か此海と此棧道に慣れて居るから強て眺めたくもない。義母が定めし珍しがるだらうと思つて居たのが、例の如く簡單な御挨拶だけだから張合が抜けて了つた。新聞は今朝出る前に讀み盡して了つたし、本を讀む元氣もなし、眠くもなし、喋舌る對手もなし、あくびも出ないし、さて斯うなると空々然、漠々然何時か義母の氣が自分に乗り移つて血の流動が次第々々にのろくなつて行くやうな氣がした。

江の浦へ一時半の間は上であるが多少の高低はある。下りもある。喇叭も吹く、斯く

て棧道にかゝつてから第一の停留所に着いた所の名は忘れたが此處で熱海から來る人車と入りちがへるのである。

巡查は此處で初て新聞を手離した。自分はホツと呼吸をして我に返つた。義母はウンともスンとも言はれない。別に我に返る必要もなく又た返るべき我も持て居られない。

『此處で又暫時く待たされるのか。』  
と眞鶴の巡查、則ち張飛巡查が言つたので

『いつも此處で待たされるのですか。』  
と自分は思はず問ふた。

『さうとも限りませんが熱海が遅くなると五分や十分此處で待たされるのです。』  
壯丁は車を離れて水を呑むもあり、皆掛茶屋の縁に集つて休んで居た。此處は谷間に據る一小村で急斜面は茅屋が段を作つて叢つて居るらしい、車を出て見ないから能くは解らないが漁村の小なる者、蜜柑が山の産物らしい。人車の軌道は村の上端を横つて居る。

雨がポツ／＼降つて居る。自分は山の手の方をのみ見て居た。初めは何心なく見る

ともなしに見て居る内に、次第に今見て居る前面の光景は一幅の俳畫となつて現はれて來た。

## 九

軌道と直角に細長い茅葺の農家が一軒ある其の裏は直ぐ山の畑に續いて居るらしい。家の前は廣庭で麥などを乾す所だらう、廣庭の突きあたりに物置らしい屋根の低い茅屋がある。母屋の入口はレールに近い方にあつて人車から見ると土間が半分ほどはすかひに見える。

入口の外の軒下に橢圓形の据風呂があつて十二三の少年が入て居るのが最初自分の注意を惹いた。此少年は其の日に焼けた脊中ばかり此方に向けて居て決して人車の方を見ない。立つたり、しゃがんだりして居るばかりで、手拭も持て居ないらし、又た何時出る風も見えず、三時間でも五時間でも一日でも、あアやつて居るのだらうと自分には思はれた。廣庭に向た釜の口から青い煙が細々と立騰つて軒先を掠め、ポツ／＼雨が其中を透して落ちて居る。半分見える土間では二十四五の女が手拭を姉

えさま  
 様かぶりにして上りがまちに大罽程の桶を控へ何物かを篩にかけて専念一意の體、其桶を前に七ツ八ツの小女が坐りこんで見物して居るが、これは人形のやうに動かない、風呂の中の少年も同じくこれを見物して居るのだといふことが自分やつと解つた。

いりくちあちらなが縁側で三人も小女が坐つて居て其ひとりこちら向き今しも十七八の姉様に髪を結つて貰ふ最中。前髪を切り下て可愛く之も人形のやうに順しくして居る廣庭では六十以上の而も何れも達者らしい婆さんが三人立て居て其一人の赤兒を脊負て腰を曲げ居るのが何事か婆さん聲を張上げて喋白つて居ると、他の二人の婆様は合槌を打つて居る。けれども三人とも手も足も動かさない。そして五六人の同じ年頃の小供がやはり身動きもしないで婆さん達の周圍を取り巻いて居るのである。眞黒な艶の佳い洋犬が一匹、腮を地に着けて臥つて、耳を垂れたまゝ是れ亦尾をすら動かさず、廣庭の仲間に加はつて居た。そして母屋の入口の軒陰から燕が出たり入つたりして居る。

はじめは俳畫のやうだと思つて見て居たが、これ實に畫でも何でもない。細雨に暮れなんとする山間村落の生活の最も静かなる部分である。谷の奥には墓場もあるだら

う、人生悠久の流が此處でも泡立ぬまでの渦を巻ゐて居るのである。

## 十

随分長く待たされたと思つたが實際は十分ぐらゐで熱海からの人車が威勢能く喇叭を吹きたて、下つて來たので直ぐ入れちがつて我々は出立した。

雨が次第に強くなつたので外面の模様は陰鬱になるばかり、車内は退屈を増すばかり眞鶴の巡查がとう／＼

『何方へ行しやいます。』と口を切た。

『湯ヶ原へ行ふと思つて居ます。』と自分がこれに應じた。思つて居るどころか、今現に行きつゝあるのだ。けれど斯ふ言ふのが温泉場へ行く人、海水浴場へ行く人乃至名所見物にでも出掛ける人の洒落た口調であるキザな言葉たるを失はない。

『湯ヶ原は可い所です、初めてゝすか。』

『一二度行つた事があります。』

『宿は何方です。』

『中西屋です。』

『中西屋は結構です、近來益々《ますます》可いやうです。さうだね君。』と兔角  
言葉の少ない鈴木巡査に贊成を求めた。

『さうです。實際彼の家が今一番繁盛するでしょう。』と關羽の鈴木巡査が答へた。

先づこんな有りふれた問答から、だん／＼談話に花がさいて東京博覽會の噂、  
眞鶴近海の魚漁談等で退屈を免れ、やつと江の浦に達した。

『サアこれから下りだ。』と齋藤巡査が威勢をつけた。

『義母これから下りですよ。』

『さう。』

『随分亂暴だから用心せんと頭を打觸ますよ。』

『さうですか。』

齋藤巡査が眞鶴で下車したので自分は談敵を失つたけれど、湯ヶ原の入口なる  
門川までは、退屈する程の隔離でもないので困らなかつた。

ひ日は暮れかゝつて雨は益々《ますく》強くなつた。山々は悉く雲に埋れて僅かに其  
 のふもとを現すばかり。我々が門川で下りて、更に人力車に乗りかへ、湯ヶ原の溪谷  
 に向つた時は、さながら雲深く分け入る思があつた。



# 青空文庫情報

底本：「定本 国木田独歩全集 第四卷」学習研究社

1971（昭和46）年2月10日初版発行

1978（昭和53）年3月1日増訂版発行

1995（平成7）年7月3日増補版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：鈴木厚司

校正：mayu

2001年11月7日公開

2004年7月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 湯ヶ原ゆき

国木田独歩

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>